

鷗思会から ごんぢは



↑60年かかってやっと『禁じられた遊び』が完全に弾けるようになりました。

元 法学部教授 岡本 幹輝先生

目指せ！百二十五歳？

白鷗大学を退職して十年ほど過ぎました。退職してちょうど一年後に、結腸に癌が見つかり手術して無事摘出しました。人生で初めての三週間の入院生活でした。私が生まれたのは自宅でお産婆さんに取り上げて貰ったので病院ではなく、その後も親族の入院に付き添いで泊まった（入院？）ことはあっても病院や病気とは縁が薄かったのです。健康保険を

一度も使わないからと健保組合から毎年表彰を受け続けるなど、高い保険料を支払っているだけになんとも経済効率の悪い人生を送って来たので、ようやく取り戻せるようになったと喜ぶ一方、歯は28本そろっています。自分も人並みに老いて来たのかと自覚させられたものでした。それでも退職後だったので、講義に穴を開けずに済んだのは内心でタイミングに感謝していました。

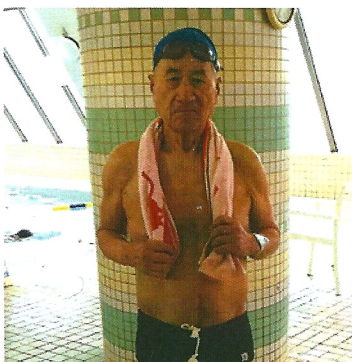
私にとって退職後の年金生活を始めることは、待ちに待った人生の最も充実した最高の時間を得るときがやって来たことを意味しています。しかし国家は私のような年齢の者をひとからげに『後期高齢者』と、なんともバカにして公称していますので、いつそのことハッキリと『末期高齢者』か『終期高齢者』とも言えよいのに思います。私なら『至福尊厳者』と尊称したいと思います。

私は、いま、誰にも頭を下げたり世話になつたりしないで（妻は要介護4と認定され私が介護していますので）、炊事、洗濯、買い物、針仕事などの日常の家事をこなしながら、毎日興味深々で楽しんでおります。何と何の食材と、何と何の調味料とを混ぜて炒めたらどんな料理になるのかと理科の実験さながらの気分を味わったり、針の穴に糸を裸眼で一発で通せるぞと誇つたり、おいしい干し柿がヴェランダで間もなく出来上がるなどと待ち望んでいます。だから年金頼りのこの期間こそ人生最高の時間なのです。このように楽しい時間を一体いつまで享受できるものやら、つまり私の余命はあと何年間可能なのか知りたいのです。日本人男性の平均寿命に達したといつても、その年齢になれば更に平均余命は毎年伸び続けるという奇妙な計算になるのでは納得できないのです。

生物の寿命は、腔腸動物のヒドラや紅クラゲでは、無性生殖時に細胞が置き換わつて生き続けるので固体は永遠の寿命があるというのは論外としても、同じ海洋生物のウニで二百



↑土下座して謝っているのに、なおもイジめる孫たち



↑世界タイ記録保持者『50メートルを一分またはそれに限らず近いタイム』を争う競技で1分を記録

年以上、ミル貝で百年、また万年生きるとされている長生きの代名詞のようなカメで百五十二年の記録があり、千年生きる筈のツルで八十年、ゾウでは野生で三十年、動物園でなら七十年ぐらいたそうです。植物となると、縄文スギと言われる屋久スギが三千年の樹齢が推定されています。それではヒトとなるとどうでしょうか。生物学的に、細胞分裂の限界回数から割り出した計算では、百二十年の寿命があるとのこと、現にこれまで戸籍のハッキリした記録上では百二十三歳という長寿者がいたそうなので、いちおう切り上げて百二十五歳まで理論上吾々は寿命があるのです。となると八十歳になった私にはあと四十五年の残された時間があるということになります。長いようでもこれまでの経験ではアツという間の時間です。それでもその年齢を目指し頑張りたいたので、どうかそのときに私が自慢できる相手として皆さん方も、祝福の拍手を下さるようあと四十五年生きていてください。